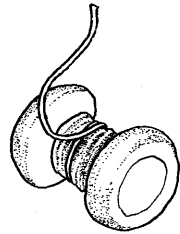


震災後の子どもたち(13)

中学生とボランテイヤ

増田 喜昭



その日は土曜日だったので、僕はてっきり学校は休みだと思っていた。神戸にボランテイヤに行く人を探していたとき、中学生四人が行きたいと申し出たので僕は「そいつはすばらしい、いい経験になるぞ」と喜んで、彼等を仲間に加えたのだ。

僕は四日市で子どもの本屋をやっているのだが、同時にその店の三階で子どもたちに少林寺拳法を教えている。単に自分が強くなるだけでなく、世の中の役に立つ青少年を育てたいという考えもあり、少林寺拳法はその教えのなかに、〈半ばは自己の幸せを、半ばは他人の幸せを〉という

のがあって、半分は他人の幸せも考えられる人になろうというものである。

兵庫県南部の大地震後には、そんな子どもたちの気持ちが一いつになって、さまざまな活動や思いが広がっていった。

地震直後に、僕は道場で義援金の話をしながら、「お年玉半分持ってこい！」などと興奮して叫んでいたらしく、翌日、一万円以上の大金を持ってくる子どもたちがいて驚いてしまった。

そんななかでの神戸行きだったので希望者も多く、とりあえず中学生以上はOK、ということにしたのだが、その土曜日は学校のある日で、さっそく校長先生から電話でおしかりを受けることになった。それは、二次災害があったらどうするのか、またその責任は誰がとるのか、といった内容で、立场上、校長先生は許可することはできないことはよく理解できたのだが、子どもたちのその

気を変えることはできないので、結局ずる休みということにして出発したのだ。

その日は、車四台で焼そば三百人分（材料は細かくぎざんでビニール袋などに入れてある）、それと、市の女性課が集めてくれた、生理用品と下着千人分をつみ込んだ。

金曜日の夜、集まった中学生たちのでたちを見て、僕たちは笑ってしまった。寝袋に着換えなど、まるでキャンプにも行くような重装備だったのである。そのときもうすでに車の中は救援物資でいっぱい個人荷物はじやまになるほどだったのだ。

何が必要か不必要かは、行ってみて体験しないとわからない。まあいいか、ということで、荷物にうずまった中学生たちを乗せて出発した。

途中、カーブの多い天理の山道で、大量の生理

用品が彼等の頭の上にドカドカッと落ちてくるというハプニングもあったが、どうにか目的地に着いた。

そこはもう、あわただしい所で、大学生のボランティアや全国から集まった人たちが、ときばきと昼、夜なく動き廻っていたので、誰も中学生にかまっっている余裕はない。

ただウロウロしている中学生に誰かの声があると、「明日は早いから早くどこかで寝ろ」。ボランティアは、とりあえず、自分のことは自分で出来ないはどうにもならない、誰も食事や眠ることを気にかけてはくれないのである。

翌日の朝から、中学生たちは、それぞれ一台ずつの自転車を与えられて、御用聞きに廻る。注文のあった品をメモして帰り、自分でその品をそろえ、また自転車で運ぶという仕事をした。

避難所やテントの中のおじいさんやおばあさんは、まるで自分の孫のような子どもたちの運ぶ物資をたいへん喜んでくれたようで、中学生たちの顔は、どれも満足そうであった。それでも、「おしゃ綿のパンツしかはかん」とか、「もつと早く持ってこい」とか、いろんな苦情も聞きながら、一件一件細かく廻ることのできる自転車は、けっこう活躍した。

翌日は、近くの小学校で焼そばを作った。長い行列の一人一人に焼そばを手渡しながら、中学生たちは、自分の昼食のことを忘れるほどよく動いた。というよりは、ボランティア隊の食べる分はないのである。その場で食、べることが許される状況ではないのだ。

夜、本部に帰ってから、彼等は、「あのー、腹へったんですが」とおそるおそる聞く。「あ、そこらへんにインスタントのものがあるやろ、バナ

ナもあつたかな、適当に食べてくれ」という返事。彼等はそれぞれ好みのカップラーメンを探し出し、嬉しそうに輪になって食べていた。

状況はきびしい。人手も物資もまったく足りない。夜中まで活動は続く。物資の調達、携帯電話の確保、自転車やバイクの手配、めまぐるしく動く。やってくるボランティアのめんどうを見ている人は少ない。皆、自分で自分のやるべき事を探して動くしかないのである。

日曜日の夜、寝不足のまま、中学生を乗せた一台だけ、四日市へ帰ることにした。「残りたい」と言った中学生もいたのだが、これ以上学校を休ませると、次に来ることが出来ないからと、説得したのだった。

帰りの車の中で、彼等は興奮して、自分の見た事や体験したことを語ってくれた。ほんとうは疲れていて眠いはずなのに、その体験はよほど強烈

だったのだろう。実に眼は輝き、生き生きとしていたのだ。

結局、彼等の大きなカバンにつめられた、着替やいろんな道具たちは、一度も使われることなく、車の中に置かれたまま二日間放置されていたのであるが、そんなことは誰も口に出さなかったのは、いまとなっては笑い話である。

僕はこの二日間の中学生たちを見ていて、正直、一日目は、連れてくるんじゃないか、と思うことも何度かあった。やっぱり、自立していないやつはダメだ、と思ったりした。しかし、ひとたび、誰かに喜んでもらえるという実感を持った彼らは驚くほどキビキビと動き出したのだ。

これは、学校や日常生活では味わうことのできない、生きたナマの体験なのである。人が人とし

て人と関わりながら生きるという単純な実感を、ひょっとすると彼等は今まで一度も味わったことがなかったのかも知れないのだ。

予定通りの、時間割通りの、学校と塾とクラブ活動の日々の中では感じることでできなかった何かを感じたのではないか。

神戸の仲間たちは、中学生四人にむかって、「お前たち完全にはまったな」と言った。それは、他人に喜んでもらえたという実感のことを言うのだ。「残りたい」「また来たい」と口々に言う彼等を見ていると、まさにはまったと思えるのである。

ポランティア、と言えるほど大したことをしたわけではないし、ほんとにささやかな行動であったのだからけれど、確実に、彼等の中に残ったものはある。

行動しながら考え、考えながら行動すること、

それは教室で机の前でコツコツ勉強すること以上に大切なことなのかも知れない。

幼い頃から、文字や数字を憶えさせることに熱心になっているうちに、行動しながら考える、遊びながら学ぶ、地域のことを考える、助け合って生きる……そんなこんなを、体感することを忘れていくのではないだろうか。

子どもたちに、もっともっと街に出て遊んでほしい……。そんなことを、中学生と神戸へ行ったこと思い出しながら考えている。

(子どもの本の専門店・

メリーゴランド)

